

『一人の笑顔のために』

★車いす陸上 中尾有沙選手から学ぶ★

12月14日(月)、中尾有沙選手の講演会を実施しました。中尾選手は、2015年には日本陸上競技選手権大会の三段跳びで優勝されるなど輝かしい成績を収められていましたが、2016年1月のトレーニング中の事故により車いす生活となりました。しかし、翌年の2017年には、パラ陸上選手として陸上トラックに復帰されたのです。

様々な不自由さを克服し、新たな夢の実現に向けて真剣に競技に向き合われている姿から、私たちは多くのことを学ぶことができました。

講演の中で、パラリンピックの創設者であるルートヴィッヒ・グットマンの次の言葉を紹介されました。

『失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ。』

今できることに精一杯取り組むことの大切さを教えていただいたように感じました。

「障がい」って何だろう？

熊本市にホープ印刷という会社があります。この会社は「障がい者」と「健常者」の共同作業所としてスタートした会社です。もう20年以上も前になりますが、この会社の岡崎社長をゲストティーチャーとしてお招きし、人権学習をしたことがあります。その時の岡崎社長の話が忘れられないのです。

『手が不自由だとか、足が不自由だとかいうのは「障害」ではありません。本人の努力次第で色々なことができるようになります。足が不自由でも、車椅子を利用することで、移動することも可能です。しかし、本人の努力ではどうしてもないことがあります。それは、「段差」です。ちょっとした段差があるだけで、車椅子で移動することができなくなるのです。それが「障害」なのです。しかし、その「障害」(段差)はまわりの人の努力で取り除くことができます。』

生徒のための人権学習でしたが、私自身の見方・考え方を問い直す学習となった授業でした。

『「障害」を取り除くのは、周りにいる私たちなのだと初めて気付くことができたのです。

平成24年度全国中学生人権作文コンテスト 熊本県大会特別賞(熊本県教育委員会賞)に選ばれた中学3年生の人権作文を紹介します。身近に起こった出来事を作文にされています。思いやりとは優しさとは何か、とても考えさせられました。

『ありがとう』

「ありがとう」 彼女にそう言われた私は、なんだかとてもうれしかった。

普段の生活でよく耳にする“ありがとう”という言葉でなぜかとても明るい気持ちになった。

それは、ちょうど一年前だった。私はいつもの通りに学校へ行き、勉強して、部活をし、帰って来たら塾に行くのが日課だった。夏休みに入り、塾に電車で行くことが多くなった。電車の中は人が密集していて、駅の係員さんから押してもらった程の時もあった。そこに、一人の女性がいた。彼女は何かの本を読んでいた。二十歳くらいの大人だった。でも、車いすに乗っていた彼女の足は、右足がスカートの下から出ていなかった。履いていたサンダルも一足しか見当たらなかった。私はなぜかずっと彼女を見てしまっていた。すると、彼女が、ずっと見ていた私に気づいたのか、こっちを見て、一瞬目があった。



彼女はにっこりと笑ったが、私はきまわずすぐに目をそらしてしまった。人は、すこしずつ減ってきた。彼女はまだ乗っていて、ずっと本を読んでいた。

「次は〇〇です。」

という車内放送が流れた。彼女は開くドアの方に行こうとしていた。だが、電車がゆれてなかなか前に行こうと思っても行けなかった。彼女の前にいた、六人くらいの高校生が、

「そこに座らないならどいてください。」

と彼女に言った。

「すみません。」

といいながら前に進もうとするが、やはり無理だった。

高校生たちは

「チッ。」

と舌打ちしながらイライラを彼女に訴えた。私はどうすることもできず、ただただ見ることしかできなかった。彼女はようやくそこを離れることができ、最後にまた

「すみません。」

と謝っていた。高校生は、

「やっと座れたし。まじ長かったわぁ。だいたいなんで車いす？」

など、座席をゆずってもらっているにも関わらず、文句を言っていた。そして、

「足が無いからにきまってんじゃん!!。」

と、一人の高校生が言った。小声で言っているつもりなのか、わざと大声で彼女に聞こえるように言っているのかわからないが、その会話は私のところまで聞こえていた。彼女は、また何ごとも無かったかのように本を読み始めていた。でも、私には、その彼女の姿は、“聞こえていないふり”にしか見えなかった。高校生たちは、バカにしたような笑い方で彼女を見ていた。その行動が私は許せなくて、この場の空気がすんごく嫌だったけど、勇気が出せず、なにもすることなく、ただ見て見ぬふりをして、黙っているだけだった。彼女はドアの前に立ち、駅に着くのを待っていた。私もその後ろに並んで、待っていた。

「ご乗車ありがとうございました。〇〇です。」という放送が流れると同時に、ドアが開いた。

彼女が行こうとすると、段差があり、前に進みにくそうにしている、乗り込んでくる人が車輪にぶつかってきたりして前に進めなかった。私の後ろに並んでいた会社員の人は、

「早くしろよ。」

と言っていた。私は、

「大丈夫ですか。私が後ろから押しますね。」

と言って押しながら降りた。自分がこんなことをするなんて…。

自分自身が一番びっくりした…。

すると、

「ありがとう。」

と彼女は言った。彼女の目は赤かった。

「あなたがいてくれて助かった。ありがとう。」

と涙を流しながら話してくれた。私はその時ふと彼女の本が目に入った。

少しぬれているのがわかった。

「きっと電車の中でも泣いていたんだ…。」

と思った。にっこりと笑って車いすの車輪を一生懸命手で押しながら去って行った。

私たち健常者にとって、障がい者の方々の気持ちがわかるわけではない。だからといって、“障がい者”を“特別”と思っはいけないと思う。ただ足を使って歩くことが苦手なだけ、ただ目を使うことが苦手なだけ、ただ音を聞くことが苦手なだけ…そう思って私は接していきたい。

「ありがとう」の一言は、たくさんの人を笑顔にする言葉であり、とてもやりがいを感じる言葉でもある。だから、今回の事を通して人の役に立つ大切さを学んだ。

「ありがとう」の言葉を大切に、感謝の心を大切に、そして今、自分が、毎日を笑って過ごせていることを大切にこれからも生きていこうと思う。

